

ドイツ、ロシア便り

川西 重忠

私はこの一年間はベルリンとモスクワで在外研究中で(二〇一一年四月―二〇一二年三月)、現在はモスクワ大学を拠点にロシア語速習とロシア研究を行っている。

ロシアの本格的な研究を思い立ったのは、二〇一〇年夏に大阪能率協会主催の「極東アジア・ウラジオストック視察ツアー」に参加して、極東ロシア、特にウラジオストックで日本とロシアの経済的、歴史的、地政学的関係に思いを致して、その研究の必要性を強く意識したことによる。もしそのときの「極東アジア視察ツアー」に参加していなかったならば、おそらく今回のサバイカル研修は無かったものと思われる。

せっかくの夏休み休暇を利用して、大阪在住の大学の親しい先輩に誘われるまま、トルコのメルシン市を訪問する約束をしていた。長年関心を持っていた「日本トルコ友好交流記念集会」に参加の予定であった。ところがその直後に大阪能率協会視察団の大森団長から極東アジア地域視察への強い勧誘を受け、躊躇の末に出発直前にトルコ行きをキャンセルし「極東アジア・ウラジオストック」行きに変更したのである。もし先約通りその時、トルコに行っていたならば、今頃はモスクワではなくそのまま日本にいたことを思うと、人の運命は誠に不思議なものである。そのうちも紆余曲折があり、最終確定までに半年近い時間がかかった。まず、滞在予定地が極東ロシアのウラジオストックからモスクワに変更になり、時期も四月から一〇月にずれ込んだ。反対にベルリンが一〇月から四月に繰り上がった。最終的にロシアモスクワの受け入れ先が確定したのは二月下旬、宿泊先が決まったのは何と一〇月の出発直前であった。

私の海外生活は合算すると一〇年近くになるが、モスクワは全くの初めてである。ロシア語が十分できるわけではない、ロシア語に堪能な大学の友人から最近、次のようなメールが来た「ロシア語が初学でモスクワに在外研究とはスゴイことです」。激励とも、慰めとも、驚きとも、呆れかえったとも、どのようにでもとれる内容であるが、

一読背中をガンと棒で叩かれた感じで、それから暫くは考え込んでしまった。いまロシア語で苦労していることを考えると確かに大変なスゴイことである。世界一難しいといわれるロシア語と自分の能力を甘く見ていたつけが今きている。研究テーマは「極東ロシアの政治経済動向―特に資源・エネルギーの視点から」であるが、モスクワから北東アジアを見るとどうなるかというテーマでもある。

モスクワ生活も二カ月目になると、地理勘もでき生活にも慣れてくる。今の私の日常生活は毎日モスクワ大学の付属語学校にロシア語の研修にゆき、それ以外の時間をロシア研究と独自の現地調査に費やしている。毎日、暗い中を(と言ってもモスクワは九時になってもまだ暗いのだが)、地下鉄で次の「モスクワ大学」駅で降り、市電に乗り換えて大学まで行く往復が私の日課である。地下鉄はモスクワでは最も重要な交通手段である。便利で一分間隔で最速九〇キロといわれるスピードで轟音とともにホームに飛び込んでくる。二本の路線が中心部のクレムリンを通過して郊外に延びている。地下鉄駅の構内そのものが観光資源になるほどいづれの駅も立派で、見るだけでも結構楽しめる。駅が多くある。地下鉄そのものは一九三〇年代初期から発達し、第二次大戦中は防空壕の役割も果たしていた。今は交通事故は少ないものの、ときどきテロの標的になることがある。二二〇の多民族よりなるソ連は各地に民族問題を抱えていることもあり、いつ首都モスクワが不測のテロ事件に襲われてもおかしくない状況だ。更に、人口一〇〇〇万のモスクワには職を求めて旧ソ連邦圏の周辺地域から二〇〇万人の労働者が押し寄せて生活している現状がある。二年前の三月二八日の地下鉄テロ事件は四〇名の死者と一〇〇名の負傷者を出した惨事として今も多くの人々の記憶に残っているが、それはイスラム信者の若い女性二人が朝の通勤時間帯を狙って相次いで(八時三十分と八時五十分)衣服の中に仕掛けた爆薬物によってひき起こしたテロ事件であった。その自爆テロは、私が毎日通学している地下鉄路線(二号线)の自宅から五つ先と八つ先の駅で起きた事件である。

私の宿泊先がモスクワ大学の近くということもあり、大学近くの名所をよく散策する。今回は身近なモスクワ大学からご紹介しておきたい。モスクワ市内には「スターリン・

クラシックス」と呼ばれる七つの大廈・高樓が聳えている。アメリカニューヨークの魔天樓にコンプレックスを抱いたスターリンが、モスクワ市内に相次いで高層建築を建てさせたことでこう呼ばれている。その中でも最も高く雄大な建築物がモスクワ大学である。四五〇〇の教室があり全部の教室を回ると東京駅から静岡県の富士市駅までの距離になるといわれている。モスクワ市のどこからでも大学中央の尖塔が見え、市民の格好の目印になっている。下から見上げると二三六メートルのその威容に圧倒される。世界的に有名なロシアが誇る名門校であり、全国から優秀な学生がここを目指してやってくる。汚職天国のロシアでもここだけはコネが効かないといわれている。雄大な外観から「世界で最も男らしい大学」との呼び声が高い。一七五五年の創立で、元はクレムリンの近くにあったが、ナポレオン軍の侵入によって破壊され、その約五〇年後の一八一七年にこの地に移ってきた。

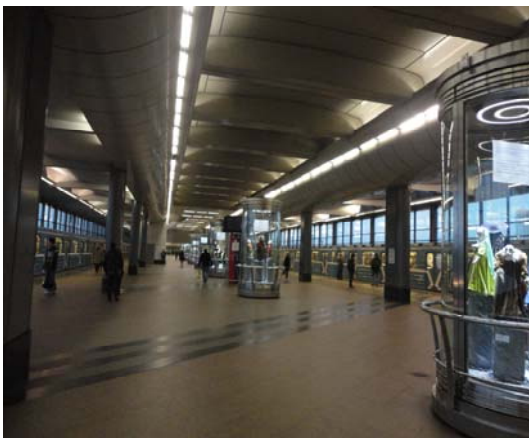
モスクワ大学の後方に「雀ガ丘」と呼ばれる丘陵地帯が連なり（雀が多く生息しているのでこう呼ばれている）、突き当りにはモスクワが一望のもとに見おろせる展望台があり、有名な観光名所になっている。トルストイの『戦争と平和』によると、五〇万の大軍を率いて欧州からやってきたナポレオンが、ボルジノの会戦でロシア軍を撃破したのち、ここからモスクワを眺めて感動する場面がある。私は眼下に大きく蛇行しながら流れるモスクワ河の流れの向こうに広がるモスクワの市街を眺めながら、ナポレオンの心境を思い感慨無量であった。（ちなみに「戦争と平和」全四章のうち三章と四章がモスクワ侵入と撤退の章）

次にモスクワで見かける日本について身近な実例から、いくつかご紹介しておきたい。何と言っても最初に挙げられるのはモスクワ市のどこにも見られる寿司屋であろう。ロシアで三〇〇〇店とも五〇〇〇店ともいわれるお寿司のお店はモスクワだけでも二〇〇〇店は有るといわれている。「ヤキトリヤ」という一見日本のお店のような名前の寿司チェーン店もありお客でいっぱいである。ヘルシーさが受けて若い女性にも人気だが、値段は日本の七、八倍はする。種類も多く味はまずまずである。従業員はいずれも全て朝鮮族やシベリアから来たブリヤート人、コーカサスから来たカザフスタン人、

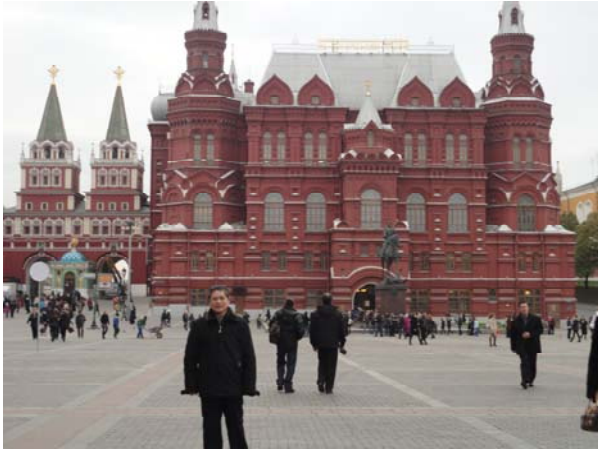
ウズベキスタン人などで彼らが寿司を握り、運んでいる。日本人従業員はまずいない、日本人料理長がいるお店もモスクワ全市内を見ても一〇店もなく（おそらく七、八店）、経営はロシア人、インド人、韓国人とさまざまである。バイトの大学生も多いようだ。先日クレムリン近くの有名な食堂街であるカメルグルスキー横丁の「ギンノタキ（銀の瀧）」という大きな寿司屋で働く一見して朝鮮族と思われる明るく利発な女子従業員に出身地を聞いたところ、樺太から来たモスクワ大学の学生であった。日本の朝鮮統治時代、特に戦争末期に日本政府によって四万人以上が南樺太に強制移住させられた朝鮮族元日本人の末裔であろう。彼女は日本語はもちろん韓国語も話せない、今はロシア人なのである。

ロシア全土には現在、約一〇〇〇名の日本人が住んでいるといわれる。上海だけで日本人居住者が四万とも五万ともいわれる中国とは比べるべくもないが、韓国に比べても日本の存在感は一部の食生活と若者のコスプレ人気を除いては五年で急速に薄れている。かつてのロシアでは「メイドイン・ジャパン」といえば、高品質の代名詞であったが、いまは韓国、中国商品の宣伝力と大量流通の前に追いつかれ昔日の輝きを失いつつある。

肝心な日露関係は「北方領土」問題で止まり、そこから先になかなか進まない図式が定着している。長大な国境を接する中国が経済発展と人口圧力で年々ロシアに怖さと影響力を強める中で、日本はロシアから見ても怖くもなければ魅力もない国へとなりつつある。一方で、日本に期待をし経済及び人的交流を深めたい思惑をロシアは持っている。日ロ関係の重要性はこの数年のうちに急速に高まるものと私は思う。



モスクワ市の地下鉄「雀ヶ丘」駅ホーム



クレムリン前にて



地下鉄駅構内通路



モスクワ大学前にて・筆者近影



寿司やチェーン「ヤキトリヤ」正面

二〇二一年十一月二十五日モスクワにて（桜美林大学北東アジア総合研究所長）